

帰られたことに疑問も出されていた。しかし二〇〇九年にトルコ南東部のテル・タイナト(古代名はクラニア、クナリアなど)の神殿至聖所で、その地の施政者に発行された誓約文書が発見された(J. Lainger, *Journal of Cuneiform Studies* 64, 2012) ことよって、ユダ王マナセも含めてそれぞれが指示通りに自らの神殿に祀った蓋然性が高まったといえる。発表者は、アッシリア宗教は実質的には独特の一神教であったと考えるが、最大版図の実現に伴う新たな政治的・宗教的方策として、ローカルな神アッシユルの更なるグローバル化を進め、神アッシユルの印章が押された法的誓約文書をそれぞれ自分たちの神のように崇拜させた。エサルハドンの「宗教改革」の一環として行われたこのようなことが、神の契約文書を神聖視する宗教運動、具体的にはユダ王ヨシヤの申命記改革に何らかの影響を与えたことも想定できる。

シェリングとレッシングにおける自然的宗教について

諸岡道比古

本論は「ドイツ観念論の父」とされるレッシングと「ドイツ観念論の完成者」と見られるシェリングとにおける自然的宗教思想について比較検討するものである。

シェリングによれば、従来「啓示に基づく宗教に自然的宗教が対比され」、宗教一般はいわゆる自然的宗教である合理的な理性宗教と啓示に基づく宗教とに分類され、しかも啓示に基づく宗教も合理化され理性宗教化すべきとされていた。この考えに異を唱えた人物がレッシングである。レッシングの宗教観は

『賢者ナータン』や『人類の教育』や『啓示に基づく宗教の成立』等において示されている。それらによれば、「人間には自然的宗教に関わる能力がある」が、その能力は人によって異なり、自然的宗教はあらゆる人間のもとで等しい作用を与えることができなかつた。そのため、歴史の必然により、啓示に基づくユダヤ教やキリスト教などの積極的宗教が自然的宗教から作り出された。それは、啓示により「より早くより容易に」理性真理に達することができるためである。レッシングによれば、今や『旧約』『新約』も必要とすることなく、理性真理を十分把握するほどに人間理性は発達し、自然的宗教を実現すべき時代になっている。このように、彼は人間にはまず自然的宗教があるが、積極的宗教を介して、自然的宗教を実現すべきと述べる。

自然的宗教と積極的宗教双方にその役割を認めるレッシングに対して、シェリングは積極的宗教を重視する点において同じであるが、異なった宗教分類を提示する。シェリングは理性も感情も宗教原理ではないとし、「人間のなかにある自己の本性によって神を定立する原理」を宗教固有の原理とする。この原理は思惟や知以前に人間を神と根源的に結びつけるものであり、人間本性に基づき生み出されるこの宗教こそ、「自然的―自然に生み出される―宗教、神話を説明する」ものである。神との根源的關係が「最初の人間」によって破棄されたとき、この原理は関係修復のため自然的過程を人間の意識のなかに生じさせる。これが神話であり、自然的宗教である。したがって、自然的宗教という概念は神話に返還されるべきである。この自

然的宗教にシェリングは超自然的宗教を対比する。超自然的宗教と自然的宗教とは互いを前提し合い、補完し合うものである。というのは、根源的関係を人間が意志して破棄したことに対し、自然的宗教が意識の異常な状態を自然的過程により修復するとともに、関係破棄について神が如何に考えているかを啓示することによって、つまり「自然ではない……異常な関係と説明される」啓示に基づく宗教によって、神の意志と人間の意志とを和解させるためである。

シェリングは自然的宗教(神話の宗教)と超自然的宗教(啓示に基づく宗教)とを「非学問的宗教」に分類する。それに対し、「学問的宗教」に「自由な哲学的認識の宗教」すなわち「哲学的宗教」を所属させる。この「哲学的宗教は存在しない。しかし……先行する諸宗教を把握する宗教」であって、自然的宗教と超自然的宗教とを媒介するものとして存在し、それらの「真の歴史的關係において初めて描かれる」。この意味で、哲学的宗教は自然的宗教と超自然的宗教とを媒介するとともに、両宗教の意味を明らかにする「真の宗教」、真の神との根源的關係を回復する「全人類に共通の宗教」であり、シェリングにとっての「あるべき宗教」である。哲学的宗教はいわゆる自然的宗教ではないが、自然な宗教原理から自然に生まれた宗教を前提にし、その構成原理を配置し直す超自然的宗教を媒介することからして、「人間の生存の根底に宗教的なものを肯定する」という意味で自然的宗教ということが出来る。この意味でレッシングとシェリングにおける自然的宗教は一致するが、積極的宗教に関する解釈には違いが見られる。

## サンタヤーナと自然的宗教

庄司 一平

宗教という理念及びメタ宗教現象を表す自然的宗教の概念は理念的である点において実定的宗教から区別される。自然的宗教の啓蒙的な近代主義に対する「理神論」「不可知論」という反発感情を超えて、概念それ自体の宗教性に関する再帰的説明への自覚が芽生え、自然的宗教の類型化及び歴史化が進行しつつある。サンタヤーナは二十世紀初頭において、宗教の自然性と実定性の両面を見据えた上で、象徴としての宗教本質論を展開した。自らの宗教論自体も象徴的営為にすぎない、と自己離脱を繰り返しながら、である。

サンタヤーナは自らの实在論哲学において、「動物的信仰」なる用語を用いて現象学的な自然的態度を解説する。実在あるいは実在性を論理的かつプラグマティックに仮定することを「信仰 *faith*」と呼ぶ。半ば本能的、半ば人為的なこの「信仰」は、自然の秩序が独立したものであること、故に所与の事実として甘受しなければならぬことを教える。また、サンタヤーナは、万物が流転する「自然の領域」と、詩や宗教、想像力の世界を「空想の領域」と呼んで両者を区別し、人間精神が「生きるべきもうひとつの世界」として、宗教を「空想の領域」の中に位置づける。その徹底的な自然主義において、束の間「休日」における解放と気晴らしを賞与する「空想の領域」は、「自然の領域」を補完する従属的なものと見なされる。さらに、「宗教と詩は本質において同一」であるとして、宗教の機能を、人間が抱く理想や期待や憧れを現実世界に溢れる様々な経験的